

誘われた女

sanukisoba

入社して1ヶ月半ほどが経った。2着しかないリクルートスーツもだいぶくたびれてきたかわりに少しずつ会社での生活にも慣れ始めた。

慣れ始めたとは言ってみただけれど、もちろんまだ僕は配属先も決まっていないうちに5月になっていたというのが実際のところだけど、大学と違ってサボることもできないしタバコ一本吸うのですら「生意気だ」と思われるんじゃないかと感じて割合窮屈な毎日ではある。まあ、僕はタバコを吸わないけれど。

朝9時に研修施設に集合し、17時までグループディスカッションやらマナー講習やら資格試験のための講習やらをこなす。基本的には班単位で行動することが多いので休憩時間や昼休みはそれなりに楽しい。これから先、ここで仲良くなった連中とともに人生を歩んでいくんだと思うと友達が多く作っておくにはこしたことはないと思えるらしく、友好的な人しかいないのでさらにやりやすい。昼休みは皆でご飯を食べるし、帰りも一緒だ。都内の大学を出た奴も地方から来た奴も、色々な経歴の人間がそろっているので刺激が多い。いつも金曜の夜になれば何人かで連れ立って酒を飲んで帰り、色々なことを学んで帰る。今のところ毎日が楽しい。

ただ、今夜はいつもと違い、皆で飲みは行かない。GW明けに同じ班の沙耶さんを食事に誘ってOKをもらい、その食事の日が今日なのだ。働くことにも少しずつ慣れてきたから、そろそろプライベートも充実させなければいけない。土日にサークルの後輩と食事をするのも良いけれど、厳しい採用を勝ち抜いて勝ち組コースに滑り込んだ以上は、同じく勝ち組コースにいる素敵な女性とプライベートを充実させ、結婚につなげなければ勿体ない。そのためにも今から準備しておくことは大切だ。

数少ないワイシャツの中から最もおしゃれなものを選び、ネクタイも一番くたびれていないものを締める。いつもはつけないけれど今日はある意味で勝負の日だからネクタイピンをしてアクセントをつける。靴も昨晚綺麗に磨いた。ここまで気合いを入れれば沙耶さんだって僕に好意を抱いてくれるはずだ。

朝、研修所に着いて彼と挨拶をした途端、私の頭はくらくらする。なんでコイツこんなわかりやすいくらいに気合いを入れているのか。数少ないワードローブの中で最も良いもの、いや、最もくたびれてないものを集めただけじゃなくいつもはつけないアクセサリーなんかつけてたりして、子供が精一杯背伸びしたような「おしゃれ」を実践している。

たとえその組み合わせ、着こなしが悲しくなるくらいに幼いものだとしても、これじゃあたかも周りに「今日はデートです」と高らかに宣言しているようなものだし、仮に相手が恋人じゃなくてもこんな気合いの入った服装の男と一緒にいるところを見られたらああ、この女性は今口説かれていたんだと皆に宣伝するに等しい。こういうこともあるのかと研修所から離れた繁華街に店を用意してもらってよかったと私は不幸の中に幸いを見出す。

今後のことを考えたらにべもなく断るのはあまり得策ではないなと打算して誘いをうけたけれど、今となってはその選択はだいぶ間違っていたんじゃないかと後悔をする。急に具合が悪くなったことにして早退することすら辞さないくらいに私はあの日の自分の選択を、呪う。いや、大丈夫だ。大学の頃はそんな最悪の合コンやらデートやらをいくつもくぐり抜けてきた私だ。あの頃と同じようにうまく乗り切れば良い。

決意を固めはしたものの、その日一日同じ班で彼を見ているのは苦痛で仕方がなかった。隠しきれない夜への期待と、今夜は2人だけの秘密にしておいた方が良いよね、とでも言いたげな「2人だけの秘密」を共有しているかのような態度と仕草。経験の浅い坊ややお嬢さんならそれでごまかせるかもしれないけれど、世の中にはそうでない人の方が多い。私としては彼が隠しきれなくなっても思わせぶりな言動をするんじゃないかとヒヤヒヤしていたが、少なくとも私の見ている前ではそのようなことはなかった。もちろん男子トイレで何を話していたかは知らない。

彼との食事は憂鬱だが、良からぬことを口走らないように早く定時になってほしいと思う。とてもスリリングな思いを抱えているうちに金曜17時はあっという間にやってきた。待ち合わせは新宿東口。金曜夜にあんな混んでいるところを待ち合わせ場所に選ぶなんて気が触れてるとしか思えない。

沙耶さんとの待ち合わせは新宿東口。彼女は気にしないと書いていたけれど、さすがに研修所から2人連れ立って出掛けたら噂になりかねない。あまり噂になってしまうと僕のためにもならないかもしれないし、何よりそうした心配りをできる男だと知ってもらいたくて僕は新宿を待ち合わせ場所に決めた。沙耶さんは最初どこでもいいと書いていたけれど、そのすぐ後に「あ、でも職場の近くだと羽根伸ばせないかもね」とつぶやいたのを僕はちゃんと聞いている。些細な気遣いだけけど嫌がられはしないだろう。

待ち合わせ場所に着くとまだ彼女は到着しておらず、僕は携帯をいじりながら待つ。何もせずに待っているとまるで彼女を待ち構えているようで格好わるい。なんでもないので、女性と食事に行くことくらい、と思わせるためにも待っている素振りは見せずにいるのが賢明だと判断

した。どうせなら遅れて到着したかったのだが、それは失礼になってしまうかもしれない。

案の定人で溢れている新宿東口。なんで私が男を探して歩かなければならないのかと悪態をつきたくなりながら親切にも彼を探す。交番から駅構内まで一通り回っても見つからず、もしかすると改札前にいるんじゃないだろうかと不安を覚え東口改札前まで降りる。するとやはりそこにいた。どうせならもっと見つけやすいところにいれば良いのにわざわざ人の多いところにいるし、なによりスマートフォンをいじりながら周囲をちらちら見回して待ち合わせ相手が早く来るのを待っているのが露骨に伝わってくる。

お疲れさまです、遅くなってごめんなさいという笑顔で今来たところだと言う。少女マンガにありそうな典型的過ぎるやりとりに寒気がするけれど私はもちろん顔には出さない。今日はどうしましょうかと尋ねると店を予約しておいたとのこと。好みを聞かれてないし私は居酒屋という空間が死ぬほど嫌いなのだが、まさか居酒屋ではないだろうな。ここまでの言動を見ている限り彼は男性ファッション誌かなにかの「デートマニュアル」でも参考にしているであろうことくらい容易に想像がつく。これから行く店にしたところでイタリアンバーか個室居酒屋かなにかだろう。わかりやすい。

彼のつまらない話を聞きながら新宿の人混みをかき分けながら進む。延々と繰り広げられる会話は大学時代の話と大学の後輩の話と今後どこに配属されたいかという話。その場で会話を組み立てることができず持っている話題を順番に繰り出すことしかできないタイプなんだろうな。「すごい」「意外」「しっかりしてるんですね」の3語を使い分けて返事をする。馬鹿にしてるようだがそれでも彼は気分がいいらしい。「男の子から嫌われない3つの単語で飲み会を乗り切る組み合わせローテ」なんていう特集を女性誌には是非組んでいただきたい。

予約を入れた店は落ち着いた感じの個室居酒屋。合コンやデート向きのお店で、学生の集団や宴会の集団はいない雰囲気重視のお店だ。ネットで評判を調べたところ、女性客から好評だったのが選んだ決め手で、実際に来てみるとなるほどたしかに女性客が多い。これなら沙耶さんもきっと気に入ってくれるだろう。

店員に案内されて着いた席は靴を脱がないタイプの個室席で、テーブルを挟んで向かい合い、片方は壁、もう片方が襖で仕切られて個室になるというもの。襖の上下は隙間があるから完全に遮断はされないけれど、その開放感と閉塞感の適度なバランスが安心感を与えるという意味では良いのかもしれない。僕の店選びは正解だったとこのとき確信した。

僕はビールを頼み、彼女もビール。一杯めからカシスオレンジを頼んだりしないあたり、僕の予想通り沙耶さんは常識のある素敵な女性だ。場の雰囲気も読まず自分勝手に振る舞うような頭の程度の低い女性は接しているだけ時間の無駄。その女性の本質なんて一緒に食事をしたとき一杯めに何を選ぶかでわかるというのが持論だ。

ビールで乾杯をし、サラダや揚げ物をつまみに沙耶さんと話をする。僕の大学時代の話や、後輩の話に興味津々で聞いている上にその都度疑問に思ったことを質問してくるあたり、沙耶さんは僕に興味がないわけではなさそうだ。もちろん、自分の話をした後には「沙耶さんはどうなの」と質問をして沙耶さんの話を聞くことも怠らない。しかし沙耶さんはおとなしい大学生だったらしく、僕ほどサークルやゼミに奔走したようではないし、むしろ大学と家の往復で4年間を過ごしたみたいな雰囲気だった。それはそれでかまわないのだが、僕が今後のキャリアプランややりたい業務について話をしたとき、どこことなく温度差を感じたのは残念だ。彼女の意識が低いとは思えないから、多分今はまだそこまで先のことを考える余裕がないのだろう。

19時にお店に入ってから早くも2時間近くが経過している。延々と語り続けられて私は疲労を通り越してイラ立ちすら覚える。何故コイツのキャリアプランややりたい業務やらを熱っぽく教わらなければならないのか。業務を通して社会がどうの世界がどうの、そんなの面接会場内にとどめておいてほしい、恥ずかしい以外の何物でもない妄想物語である。

案の定個室居酒屋だし、食事はとても、美味しくない。お酒も十人並みだし、何より男女2人で入って飲み放題をつけるとはどういう了見か。彼が参考にしているデートマニュアルには書いてないのだろうか。男女2人でお店に入ったら飲み放題は厳禁、とか。あなたに異性としての興味はないですよ、ということを示すためにビールしか飲んでいないけれど、この無言のメッセージがちゃんと伝わっているのかは甚だ疑問。多分伝わってはいないだろう。

ここまでの流れから判断する限り、恐らく彼は私が席を立つタイミングを待ち望んでいる。私が化粧室にでもたった間に会計を済ませておく算段だろう。でも、そんなことされてしまうと私の払う分がどうだのご馳走するだのしないだのという醜いやり取りを繰り広げなければならなくなるし、「じゃあ次のお店は出してもらおうかな」などと慣れてないセリフとともに次の店に行く口実を与えかねない。だから私は席に座り続ける。

そろそろ2時間が過ぎようとする頃合。僕は彼女が席を立つタイミングを待ち望んでいるのだが、そうした素振りを一切見せない。席を立ててくれればその際に会計を済ませることができるのだが、こうした場合どうすればいいのか僕には経験がないからわからない。こういうときは少し気を利かせて化粧室にでもいくのがマナーじゃないのか、とほんの少し焦るけれど、恐らく沙耶さんがそれだけすれてないという証左だろう。遊び慣れてないだけで、彼女の魅力がさらに増すエピソードではないか。

ただ、この店の会計を僕が持てないということはつまり次の店の会計をもってもらおうという口実で2店めに向かうことができないということだ。どうやって2店めに誘えばいいのだろう。支払いのタイミングと、次の店に誘う方法、僕はいっぺんに2つの課題を与えられた形になる。こうした場合にどうすればいいかなんて今までに雑誌でもネットでも見たことがない。

目の前でどうしたら良いのかを必死に考えているのが手に取るようにわかる。私は化粧室に向かわないし、彼は会計ができない。表情に出さないよう注意しながら、その混乱に陥った姿を見て愉しむ。それは見ているととても愉快的のだが残念なことにより一緒にいたい相手ではないことが判明してしまったので一分でも早く帰ってしまいたい。

そこで私は「もうこんな時間だね、会計お願いでしょうか」と一方的に宣告し店員を呼ぶ。店員の持ってきた勘定書を見て即座に一人当たりの金額を割り出し、端数は私が出すねと返事を言う隙も与えず淡々と進める。不味い料理、大したことの無いお酒、つまらない話、2時間で4500円。非常にふざけた金額だとは思うけれど、雰囲気代を加味すればこれが相場といったところだろう。

店員がレシートと、おつりの6円を持ってきたとき「おつりはとっといて」と言いそうになってしまったのだが、今日の自分の演じるべきキャラでそれを言うてはいけないと慌てて思いとどまる。席を蹴り飛ばして立ち去ってもまったくかまわない相手ではあるけれど、来週に言いたい放題研修所で言いふらされても困る。今日は彼の尊厳を傷つけないようにしながら1分でも早く帰るのがゴール。

結局会計は沙耶さんが率先してやってくれた。おごられるのが当然と思う女性がほとんどな世の中においてこうした女性はとても貴重な存在だ。僕はますます沙耶さんとお近づきになりたいと願う。店を出てエレベーターホールで待っているとき、どうやって次のお店に誘うかを考えるあまり僕はちょっと落ち着きを失っていた。エレベーターのドアがあいたのにも気付かないし、沙耶さんの「美味しかった」という言葉にも気の利いた一言を返せなかった。大きな失点だ。

でも、美味しかったと言ってくれたということは全体で見たらプラスなわけで、気の利いた一言を返せなかったことくらいなんでもない。些細な失敗に気を取られてはさらに大きな間違いをおかす。少なくとも彼女は僕のセンスを認めてくれているし、それは今後の関係においても良い方向に働くはずだ。

どのタイミングで次の店に行くつもりはないことを伝えるか、と考えていたが、店を出てエレベーターホールで彼の表情を見たとき、悩む必要もない簡単な問題であるとわかった。彼はどうやって次の店に誘おうかで悩んでいる。このエレベーターをおりたとき「駅はどちらの方向だろう？」と尋ねればそれでオしまい。

どうやって誘おうか逡巡し、その逡巡が終わらぬうちに私の方からお断りを申せば彼は「もっと早く決断し勇気を出して誘えば良かった」と後悔して次は頑張ろうと思ってくれる。後腐れなく、自分の責任だと思わせるには相手に逡巡させることが重要だ。

経験値の低い男なんて、一次関数を解くように簡単。

結局、エレベーターを降り、ビルの入り口に立ったとき沙耶さんが「駅はどちらの方向だろう？」と聞いてきたことで今日はお開きとなった。2店めにいけるだろうと思っていただけにちょっとつまらないし残念だ。いや、正直なところつまらない思いが強い。

駅に向かう道すがらの信号待ち、話しかけはするけれどこのまま帰るのも悔しいなという思いが強く、駅に着いて沙耶さんをお見送りしたら後輩に電話でも掛けてみようなどと打算をする。沙耶さんは帰る以外の選択肢はないらしく、ますます僕は沙耶さんとお別れした後のことを考える。

駅に向かう道すがらの信号待ち、話しかけてはくるけれど、肩掛けかばんをいたずらに弄ぶ様子からは、私がここで帰るのがつまらないと感じていることが如実に伝わってくる。

私も週末の金曜日をつまらない食事で無駄にしてしまって不満ではあるけれど、これ以上一緒にいるよりはきっとマシ。新宿の改札で彼にお別れしたら、反対側の改札から出て飲み直して帰ってもいいかもしれない。